

アンコンシャス・バイアス

2023. 1. 17

「アンコンシャス・バイアス」とは、無意識の思い込み、偏見と訳される。誰かと話すときや接するとき、これまでに経験したことや見聞きしたことに照らし合わせる。「この人は〇〇だからこうだろう」「ふつう〇〇だからこうだろう」というように、あらゆるものを自分なりに解釈する。このような脳の機能によって引き起こされるものである。

アンコンシャス・バイアスは日常にあふれていて、誰にでもある。あること自体が悪いわけではない。問題なのは、気づかないうちに、決めつけたり、押し付けたりしてしまうことである。我々は、同じものを見ていても、一人一人解釈は異なる。

我々は、アンコンシャス・バイアスがきっかけとなり、無意識のうちに、知らず知らずのうちに、相手を傷つけたり、苦しめたりしていることがある。そういったことに対処するためにも、知っておいたほうがよい概念である。

日常の中のアンコンシャス・バイアスの例として、5つを挙げるができる。人の属性をもとに先入観や固定概念で決めてしまうステレオタイプ、問題があっても、私は大丈夫と思い込んでしまう正常性バイアス、自分の考えや経験則を正当化する情報ばかりを探してしまう確証バイアス、権威のある人のいうことは間違いないと思い込む権威バイアス、周りと同じように行動しようとする集団同調性バイアスである。

決めつけや押し付けが要因となり、人間関係に影響を及ぼすことがある。それは、職場での大人と大人でもそうだし、生徒と教師という関係においてもそうである。

普通はそうだ、たいてはこうだという価値観の決めつけはないだろうか。よくあるように思う。どうせだめ、きっとむり、そんなことできるわけがないなどの能力の決めつけ言葉を聞くことはないだろうか。よく聞く。そんはずはない、こうに決まっているなどの解釈の押し付け言葉はないだろうか。あるように感じる。こうあるべきだ、こうでないのだめだという理想の押し付け言葉はないだろうか。これも、あるように思う。

こうして考えると、アンコンシャス・バイアスは、日常にあふれていることがわかる。誰にでもある。あることそのものは仕方がない。気づかないうちに、決めつけたり、押し付けたりすることを何とかしたい。アンコンシャス・バイアスがあるということを意識して行動するようにしたい。

特に、学校という教育の場では、無意識の思い込みや偏見は危険である。教員は、自分にはアンコンシャス・バイアスがあることを自覚するべきである。それを意識していけば、ものや人の見方が変わったり、物事のとらえ方が変わったり、他の可能性を考えてみようとしたりするようになる。そうすれば、生徒に対する言葉かけや接し方も変わってくることだろう。そう考えると、重要なことであることがよくわかる。